

GOMA BOOKS

ねむの木の子どもたち

女優 ねむの木学園園長 宮城まり子



GOMAN BOOKS

ねむの木の子どもたち

昭和 48 年 7 月 5 日 初版発行

昭和 52 年 9 月 1 日 36版発行

著 者 宮城まり子

発行者 篠原 直

発行所 株式会社 **ごま書房**

東京都千代田区九段北 4-1-13

電話 東京 (239) 0231(代) 振替 171819

印刷 堀内印刷 製本 ナショナル製本協同組合

0237-01022-2429

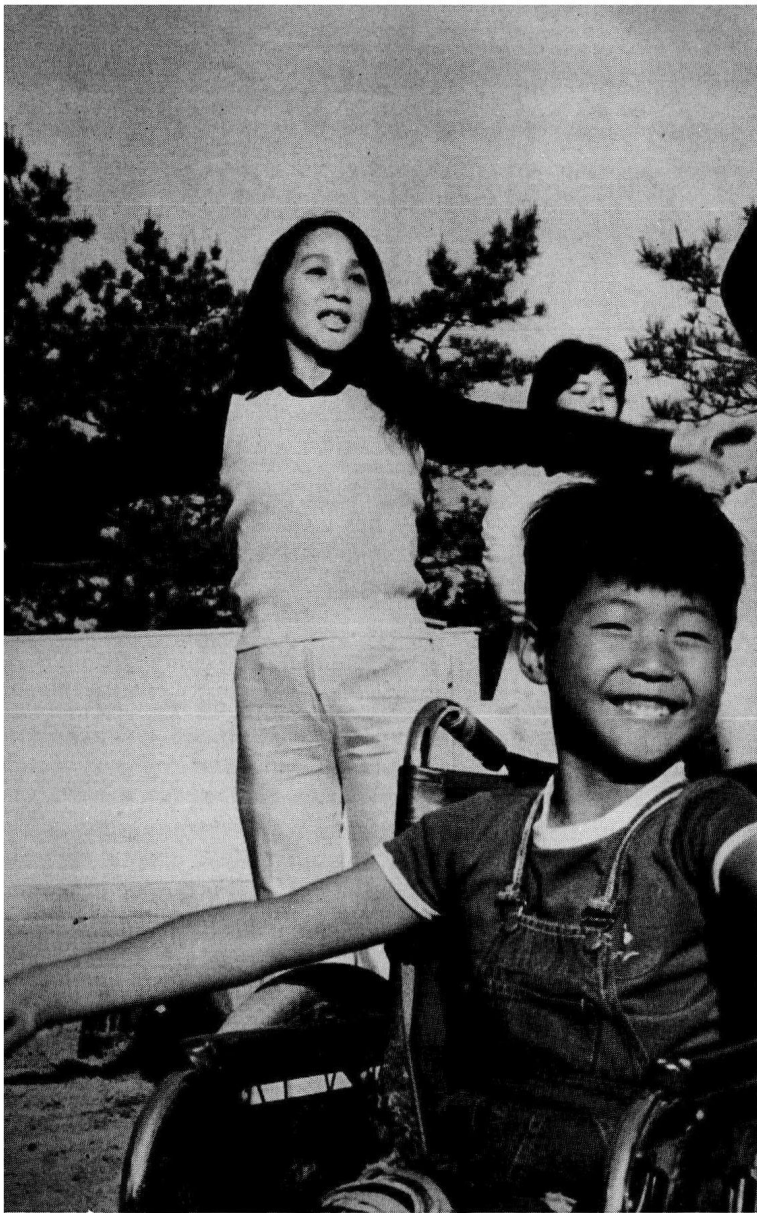
ねむの木の子どもたち

GOMA &

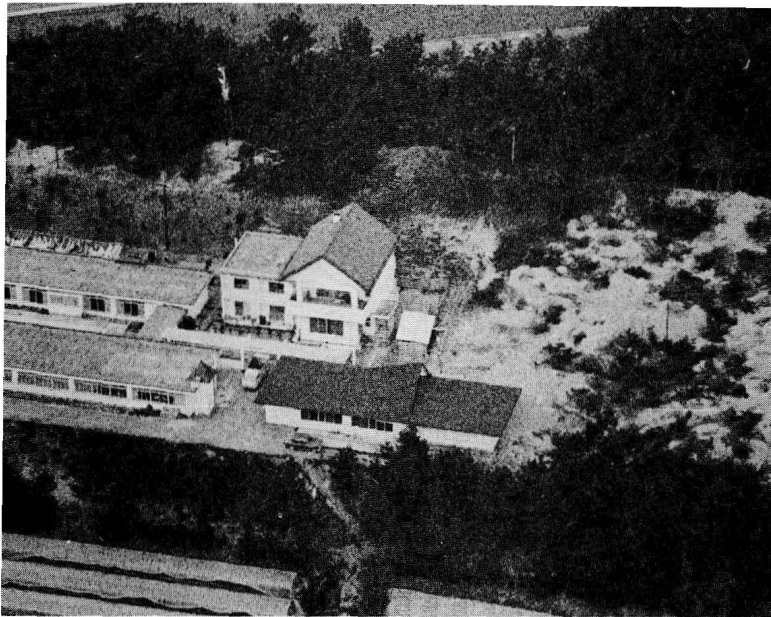
BOOKS

宮城まり子

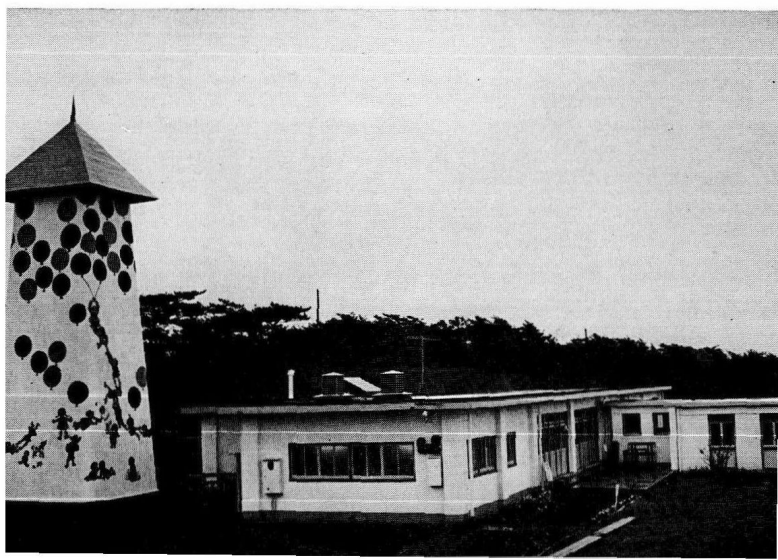
ごま書房1022 ゴマブックス

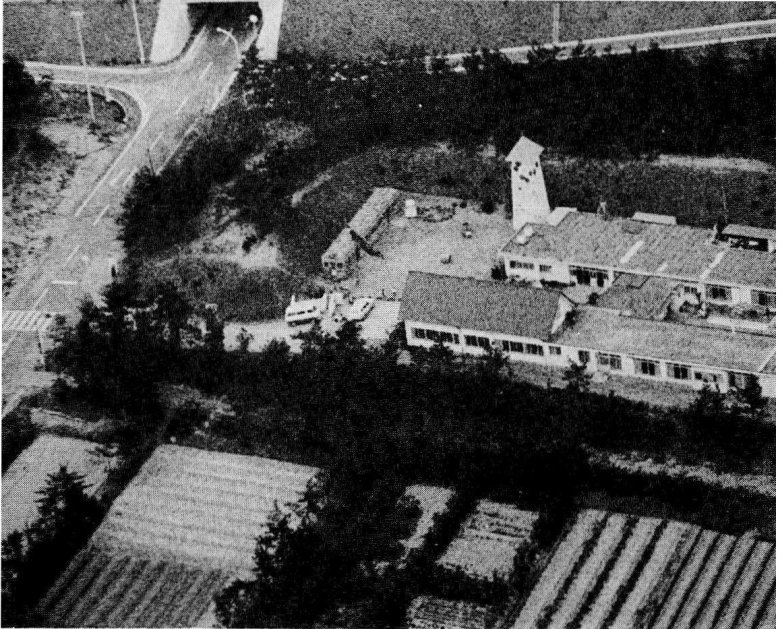


ねむの木学園にねむった朝、どんなにまへの晩、遅くとも、かならず子どもたちのだれかが起こしにきます。「マリコちゃん、オキナサーイ。」ラジオ体操のときの、朝の空気はおいしいです。



えんしゅうなだ
 遠州灘にそう松林の中、ねむの花咲く丘にねむの
 木学園があります。はてしなく続く砂丘、そして太
 平洋——ここが子どもたちの楽園になれば、と考
 えました。水槽の鉄骨は冷たい感じがするので、トタ
 ンで囲い、三角屋根をつけ、フウセンを飛ばしてい
 る子どもたちを四十人描きました。上・現在の全景、
 下・設立当時。





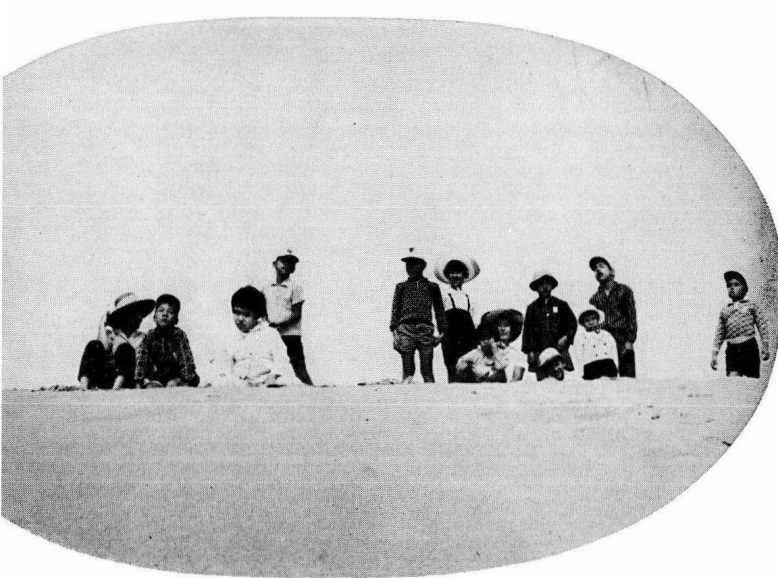
毎年毎年、工事が進み、また今年も——。だって、子どもたちにそれが必要なのですから。斜面のプール、安ブシンはみな私の絵でゴマカシマシタ。



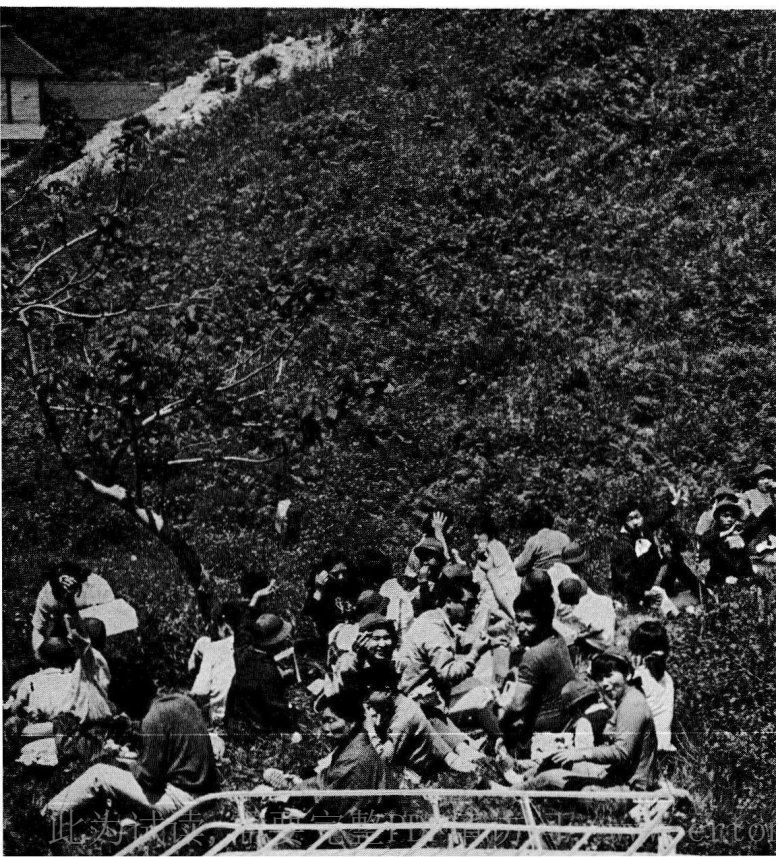
「この海のずっと遠くになにがあるの。」
「うーん、遠い国。」
「行きたいナ。」
「行こうか？」
「砂を掘ってどんどん行くと、着いちやうのよ。」
サトシ君がころんで、ズボンを濡らしたので、私のをはかせて、だれも見えないと思っていたら、知らない人が送ってくださった好きな写真。

この美しい砂丘も、訓練の場所になります。だって、ころんでも、怪我をしないんですもの。





最初の一年は十二人の子どもたち。
「二十四の瞳ね。」と笑いながら、これ
じゃ、さみしいだらうなと思ってました。
今、こんなに子どもたちも職員も増え、
遠足のとき作るおにぎりの数が増えま
した。あのころ一つしか食べなかつた
子が三つも食べ、おぶって行った子が
ひとりで歩きました。
わけもなく、私は感動します。





「まり子ちゃん、あのね、ほくね、あのね、それでね。」「なーに。」「うん、あのね、それでね。」「なーに。」「うん、それでね、あのね、ほくね。」「そーお、わかった、抱いてほしいのね。」

まえがき

ねむの木の子どもたちと私のつながりを書いてと言われて、イヤダ、イヤダとまる二年、まあ、よくも待ってくださいました。

最初のうちに書いたのは、子どもたちも大きくなったけど、そのままにしておきます。今、まえがきを書きながら、あら、あれも書けばよかった、これもと、心残りです。

お医者様でない私の見た子どもたち、心理学者でない私の感じた子どもたち、専門家でない園長のはからった子どもたちへの処置、でも、女優としての私の触覚の先端に感じる子どもたち、ひとつひとつ読み返しながら、職員が足りなくなって泣いたこと、急に何人かお嫁に行かれて、気が狂ったみたいを探し回ったこと、どうしようと思って、夜中にプールの横にたったら、ひとりずつ職員がよってきてくれたこと、同じ仕事を持つ連帯感。全員、感動で泣いた運動会、全員苦しんだ子どもとの別れ。園長と理事長を兼任するねむの木の特色を、お役所に理解してもらえない悲しさ。そのため、なんども頭を下げた日、提出する書類づくりがうまく書けず叱られた日、わかってもらえない両親のいるもどかしさ。

なによりたいせつな、子どもたちの生命の尊重。

十二人から、五十人になったとき、幼稚園とまちがえられたのか、儲かるでしょうねと、友だちに言われ、世間では、福祉は、こんなふうに使われてるんだな、と苦笑した日。

はじめて両足で立った子の、その日の感動。

すべて、五年たったのです。素人ゆえに、わけもわからず大蔵省に行ったり、大臣に逢に行ったり、ただただ夢中の五年目に、政府は正式に、肢体不自由児養護施設という制度をつくってくださった。

でも、私立は、ねむの木だけ。あと、やっと昨年、山口県立と大阪府立ができただけ。早く、日本中に建って、私立で建てる人が私の味わった苦しみを味わうことなく、肢体不自由児、脳性マヒ児の対策がたくさん高まってほしい。整肢療護園の園長、小池先生がおっしゃった。もっともっと、あなたは声を大きくして、子どもたちのために叫んでくださいと。

それにしても、もうやめた、もうやめたと思いながら、五年たった。なぜ、ねむの木を作ったか？ 自分で理屈をつくっても、どれもほんとうで、どれも、あとから考えること。ただ、言えることは、私が彼と彼女たちを知ってしまったこと。そして、就学猶予という悲しい言葉があったことです。形が不思議なら、心も曲がっていると、誤解されている弱者といわれる子どもへの

私の正義感、感傷、幸せであることのもうしわけなさ。そして、考えたすえ、お国に、今ないなら、だれかがしなくちゃ、ただそれだけみたいな気がします。

もっとも、子どもたちのために小児神経科、循環器科、眼科、精神科、整形外科、聴力、言語、心理学者、いっぱいほしい。子どもたちは、自分の責任で病気になったのでもなく、ほんのささいなことで、脳に障害を持ってしまったのですから。

全国の障害児のお父さんやお母さんは、どんなにくだらぬと思う。いっしょに死のうと思わなかった人はあるまい。そう思うと、「やるんだ。」という勇気がわいてきます。

ひとりひとりお名まえは出しませんが、たくさんの子どもを守ってくださる先生、ありがとうございます。それから、まだ、ほかに、たくさん先生の先生のお心を子どもたちの上にくださいますよう、私は、素人の感覚で書きました。お教えください。また、保母と書くか保母さんと書くか、保母さんのほうがやさしいと言われましたけど、私も同じ職員です。自分のうちのものをサンプけにしませんでした。ありがとう、私の指導員、そして保母さん。

昭和四十八年六月五日

みやぎ
宮城まり子

目次

口絵 ————— 1

まえがき ————— 11

天使が通るとき ————— 三弘みつひろのこと — 19

いちめんのなのはな ————— ゴロウのこと — 30

松葉杖の選手宣誓 ————— 圭子けいこのこと — 36

・手紙 ————— 42

・詩 ————— 44

しゃべることのない二人 ————— 横田よこたのおじちゃんと成君なりのこと — 45

カエル、死んじやった — ヒデトシのこと — 49

・手紙 — 57

お父ちゃん、こないで — 正吾しょうごのこと — 59

・詩 — 67

ミドリ、ミドリ、ミドリ！ — 茂樹しげきのこと — 68

・手紙 — 72

アッ、トンゲツだ — アキヒロのこと — 76

・詩 — 80

乙江がプールに飛び込みました — 乙江おとえのこと — 82

・手紙 — 87

・詩 — 92